

住民が設立した資料館とその展開：滋賀県の田上郷土史料館の事例から

著者	金山 喜昭
出版者	法政大学キャリアデザイン学部
雑誌名	法政大学キャリアデザイン学部紀要
巻	15
ページ	205-219
発行年	2018-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/13758

住民が設立した資料館とその展開

～滋賀県の田上郷土史料館の事例から～

法政大学キャリアデザイン学部 教授 金山 喜昭

はじめに

昭和30年代以降の高度経済成長期を迎えて、人びとの生活様式が大きく変わるようになると、生活道具として使われていた民具が廃棄されるようになり、長年にわたり伝えられてきた生活文化が失われるようになった。そのことに危機感をもった人びとが全国各地で民具を集め、中にはそのことが契機となり、博物館や資料館を設立したところもある。

昭和43（1968）年、滋賀県旧上田上村（現大津市）の住民達は田上郷土史料館を設立したが、その活動は今日まで続いている。本稿は、その経過の中から、史料館をめぐる住民の連帯感や信頼関係が生まれるようになったことに着目し、その形成過程を検証することを目的にする。そのために、次のような点に留意して検証をすることにする。

- ・なぜ民具の収集を始めたのか。
- ・民具の収集や史料館の設立や活動から住民の連帯感や信頼関係が生まれるようになったとすれば、それはどのようなことなのだろうか。
- ・史料館の設置目的の一つに掲げられている「郷土愛」とは、どのような意味合いで用いられているのか。

また、郷土博物館のあり方を再確認するために、柳田國男が問題提起をした郷土館観と同館の事例との整合性についても検討することにした。

なお、史料館とは、本来、文書資料などの史料を保管、利用に供する施設であるが、田上郷土史料館の場合は、所蔵資料の多くが民具であることから、本

稿のタイトルを資料館と呼称することにする。また、「郷土」を冠する博物館やそれに類する施設には郷土博物館、郷土資料館、郷土館などの呼び方があるが、本稿では地域の資料を収集、保管、公開する施設として同義に取り扱う。

現地には、平成29（2017）年8月4日、同年12月1日に訪れて、館長の東郷正文氏から聞き取りをした。本稿のデータの多くは、この聞き取り調査によるものである。

1. 住民による田上郷土史料館の設立

(1) 旧上田上村の牧地区について

旧上田上村牧の地は、近世には膳所藩領であった。明治22（1889）年に牧村を含めた平野、中野、芝原、堂、新免、桐生、大鳥居の八カ村が合併して上田上村となった。この地域は、田上山地と瀬田丘陵に挟まれ、大戸川が広がる田上の盆地は「田上米」を産出した穀倉地帯である。上田上村は、昭和30（1955）年には、瀬田町と合併、そして昭和42（1987）年、瀬田町が大津市と合併し大津市となった。

大津市南部のこの地区は、奈良時代の藤原宮の造営や東大寺などの寺院の建立に多くの木材が伐採され、その後も無計画な乱伐が続き、全山が見るも無残なはげ山になってしまった。はげ山は洪水を誘発し、この地の歴史は水との戦いの軌跡であった。大戸川の氾濫は村や家も田畑も押し流し、賽の河原のような光景とした。氾濫は幾度となくあったことから、江戸時代になると、村落のほとんどで山手への移住が行われ、今日に至っている。現在、牧地区は118戸、400人余りの集落である（平成30年1月14日現在）。

(2) 二人の若者が民具の収集を始める

東京オリンピック前の昭和35年頃から、東郷正文氏と田村博氏の二人の若者が中心になり、牧地区を中心にした旧上田上村の民具を集め出した。二人は、小・中学校の同級生であった。当時、東郷氏は真光寺の副住職をしながら中学校の教員を勤め、田村氏は国鉄職員であった。

その頃は農業の機械化が始まり、家の改築も行われるようになった。はじめは屋根を葺き替えた藁を村はずれの田んぼで燃やしていた。新築する家もあつ

だが、牛小屋のあった所を応接間に増改築する家もでて、次第に日常生活で使っていた民具を燃やすようになった。二人は、捨てられて山ずみになった多くのものなかから、気になるものを引っぱりだしては「これは何をするものだろうか」という疑問と好奇心にかられて、民具を拾い集めたという。古老が「これならあそこの家にもある」と教えてくれると、その家に行ってもらってきた。こうして集めたものを真光寺の境内で保管するようになった。

東郷氏によれば、「当時、わけの分からないモノがあった。『これは何やろう』と聞くと、古老が『鞍やで』と教えてくれた。子牛用の鞍だった。ワラ製品や竹製品は不明のモノが多かった。昔の人達は藁や竹を用いて何でも作っていたが、その使い方が分からなかった」という。収集時には、寄贈者名や民具の呼び名、使い方などをメモして資料に仮札を付けた。

時代が変化する中で、地域の民具が失われてゆくことに危機感を持ち、二人は、それらを何とか後世に残せないかと自然発生的に活動を開始したのである。

(3) 史料館の設立

二人は集めた民具を真光寺の太鼓楼に仮置きした。最初は、地道に集める二人の様子を眺めていた年配の住民達が、次第に協力してくれるようになり、各家からも民具が寄せられるようになったという。

自治会も彼らの活動を応援しようと動きだした。新しく自治会館ができたことを機に、集会施設であった牧会館を寺の境内に移築して、集めた資料を収蔵することに決めた。住民たちは左官や大工仕事など、持ち前の技を発揮して移築した。当時は、地元の人びとがそれぞれ手分けをして、家をつくるのができた時代だったという。

昭和43年、地域の人びとの協力により集会所は、展示収蔵施設となった。同年秋に「牧郷土史料館」と呼んだが、翌年正月、名称を田上郷土史料館と改称し正式に開館した。東郷氏によれば、「古いものを集めるのだから歴史の『史』の方がよいなあ」ということで、「史料館」にしたそうである。史料館には次のような運営方針が書かれた木版が掲げられている。

この田上郷土史料館は明治百年を記念して郷土資料を展示しもつて歴史を

知り古人の労苦を偲び郷土愛を育み郷土文化の向上の一助となることを目的として設立する 因みに本館は元牧會館をこの地に移築 牧総家の協力に依り完成翌一月五日に開館す 昭和四十三年十月廿三日 牧青年會議 (アンダーラインは筆者による)

その後、収集品が増えて史料館に収まり切らなくなると、牧地区の米蔵倉庫(昭和35年建設)を収蔵庫に転用することを自治会から市に要望して実現した。米蔵倉庫は田上郷土史料館収蔵庫になった。

2. 史料館の活動

(1) 研究者達との交流と調査活動

史料館を開館する数年前から昭和50年代初頭までの約10年間、二人はそれぞれ役割を分担して史料館の活動に取り組んだ。東郷氏は、地域の古老達から聞き取り調査をした。滋賀民俗学会の菅沼晃次郎から「資料の整理は後でもできる、とにかく地域のことを残しておけ」と言われて、古老達から、民具のことばかりでなく、農業や年中行事、村の生活のことなどを聞き取り調査した。「モノを集めるだけでなく、古老の話を聞くこと」「今と違うことを聞いたら書きとめておけ」という菅沼の助言に従い、古老の話を次々と書き留めていった。

東郷氏が作成した資料カードには、聞き取りの記録ばかりでなく、多くの写真が貼られている。例えば、「あんぐり小屋」(各家が田んぼの脇に立てた草葺の物置小屋)について、明治33(1900)年生まれの古老(当時71歳)から聞き取りをした資料カードには、次のように記されている(昭和46年3月19日調査)。

「桐生・平野のあんぐり小屋。桐生や平野の人は山田へ夏草刈りに行くときに夫は空の車(大八車)を引き、もしくは牛に引っぱらせて、嫁は天秤棒の前後に赤ん坊と、お茶や弁当をかついでいく。山田につくと赤ん坊は小屋の棟にフゴのまま吊り下げておく。これは蛇や蜂、毒虫を防ぐためである。牛は小屋の近くに立てているつなぎ柱につないでおく。そして夫婦が草を刈り、刈った草は土手に干す。赤ん坊がオシメをぬらすと、そばを流れる溝で洗い、これも土手に干しておく。昼は小屋で弁当を食べ、昼寝をしてからまた夕方まで草を

刈る。刈った草は引いてきた大八車に積み赤ん坊はまた天秤棒でかついで帰る」。今では見られなくなった「あんぐり小屋」のことや、当時の生活の様子を詳らかに知ることができる。

また、彼らが実施した調査は、とても精力的なものであった。必ずしも地元だけを対象にしたものでなく、国鉄の車掌だった田村氏は、収集した民具の由来や使い方などが分からないと徹底的に調べたという。例えば、農業用として川や沼から水をくみ上げるときに使った「龍尾車」については、類例を求めて全国に照会し、各地に足を運んで調べた。類似したものが他の地域にもあることを知り、地元のモノと比べて皆と語り合ったという。

(2) 連絡誌『郷声』からみえる活動の志

昭和44（1969）年から3年間、東郷氏は史料館から『郷声』というガリ版刷りの連絡誌を発行した。史料館のことを地域の人達に知ってもらい、支援や協力を得ることを目的に始めたものである。編集の工夫として東郷氏は、「理屈を付けたら嫌がられるから、分かりやすく興味をもってもらえるように書くことに知恵を絞った」という。

その第一号（昭和44年1月）には、史料館について次のように目的が書かれている。「われわれは郷土の民俗史料を展示し郷土の歴史を知り、もって郷土愛を育み、教育文化の一助となることを目的として結成する」。また、開館にあたり「この史料館を中心として、結成目的にそって、おとしよりには昔なつかしいこいの場として、また若者には、古人の労苦をしのんで、郷土愛を育てる殿堂としていただくようますます努力する覚悟です」（アンダーラインは筆者による）と抱負が語られている。

「ゆい」を考える」というテーマの記事では、「田植もようやく終わりましたが、田植によくいわれる「ゆい」とは、結う、結ぶ、結合、共同を意味する言葉であり、わが国の共同制度の一種であって、組合各戸間の労力交換であります。これは個々の労力の強弱にかかわらず一日の労力に対しては必ず一日の労力を返して、金銭や物品で埋合わせ出来ないのが特徴の一つです。現在、全国に最も広くかつ盛んに行われているのは、やはり田植であって、その他に刈入、脱穀、籾すり等の農事、山仕事、屋根葺替等にもその制度が行われており

ます。この古くから伝わる助け合いの精神を、ややもすると利己的になりがちな現代にも、種々の面で生かしたいものです」(『郷声』第二号、昭和44年6月22日より)。

昭和30年代までは、まだ村人総出による共同作業が行われていたが、東京オリンピックを契機とし、昭和40年代になると急速に変化していく、当時の様子をうかがい知ることができる。

また、同連絡誌第五号(昭和45年1月5日)には、牧地区の民有地から発見された古井戸について、郷土史家の元持佐太郎からのアドバイスを紹介しながら、地主から理解を得て現状のまま保存するようになったことを伝えている。そのアドバイスとは、「この井戸は石組みや深さからみて、飲料用水用の井戸であることは間違いない。陶片や底部の板わくの腐り具合から考えると、少なくとも三百年前のものである。それは元禄時代にあたり(中略)(大戸川の)大洪水がしばしば起こって、徐々に高地に移動した頃であった。(中略)旧牧村の唯一の遺跡として保存されることは、たいへん意義のあることだと思います」。

同号には、開館1周年を振り返り、次のような希望も述べられている。「素人ばかりの集団ですが、どうやら郷土史の一端にふれることができてきたと思っています。将来は湖南地方に随一の民俗博物館にしたいという大きな夢をもっております」と抱負を語りながら、「現在までは武士、貴族など権力者の歴史のみ教えられておりましたが、百姓等常民にも同じ歴史があるはずです。うもれた有形、無形の常民史料はまだまだ発掘されると思います」(『郷声』第五号、昭和45年1月5日)というように、農村の住民として、自らが自分たちの地域の歴史に目を向ける姿勢をもち、それを明らかにしていくことを宣言しているのである。

(3) 研究者との交流と出版物の刊行

この時期、滋賀県内では民間の滋賀民俗学会が、県内の民俗文化の調査研究や普及活動をしていた。当時、事務局長の菅沼晃次郎から、「この郷土史料館は昭和44年1月5日に開館したもので、町内の有志の協力で小さいながらも同町真光寺の境内に一棟建てられ、民具三〇〇点を集めている。今後は単に資料

を集めるだけに止まらず、積極的にこの地区の資料報告書を出してゆくように心掛けて頂きたいものである」と賛辞が贈られた。

こうした声援に応えるように、地区の年中行事などの調査に取り組んだ成果を、昭和47（1972）年に報告書『田上の民俗』としてまとめた。その後も『田上のあしあと』（昭和48年）、『田上の寺院』（昭和50年）、『田上集の里』（昭和54年）というように、交流のあった研究者からの寄稿もあり、史料館から次々にその成果を出版物として刊行した。

滋賀民俗学会の元持佐太郎や橋本鉄男などの滋賀県内の研究者ばかりでなく、梵鐘研究者の坪井良平は真光寺に滞在して地元の梵鐘調査をした成果を報告書に寄稿してくれた。「文章は一行一文でも確信のないことを文字にはいけない」とアドバイスをしてくれたという。民俗学者の宮本常一からは、滋賀民俗学会での講演を聞いたところ、「佐渡には50回は行っている。佐渡の人よりも佐渡のことをよく知っている気持ちが大切」と言われて、「このオヤジは何という凄い人か」と驚いたという。今から40年前の思い出である。

3. 近年の活動

（1）大津市歴史博物館で企画展を開催する

平成29（2017）年7月から8月までの1か月間、大津市歴史博物館において企画展「田上てぬぐい—暮らしと文化—」が開催された。史料館の収蔵品の中から特に衣類資料の「三巾前垂れ（マエダリ）」や「田上てぬぐい（テネン）」、仕事着、布団地などに焦点をあてつつ、同館が収蔵する、旧上田上村のかつての生活を伝える民具や生活の様子を展示したものであった。

筆者もこの企画展を見た後、東郷氏から聞いたところによると、昔は水害により家が流れ、田んぼも流れて荒廃すると、その土地に綿を栽培して、手織りが盛んになったとのことである。着るものや蒲団などは自分たちで織ったことを聞き、田上手織りによる「田上てぬぐい」の地域とはそのような歴史的な背景があることを知った。

（2）民具の整理とデータベース化

同館には、民具ばかりでなく、膨大な衣類資料を所蔵している。現在、龍谷

大学国際文化学部で民俗学を担当していた須藤護氏が、同大学の里山学研究センターの活動として、学生たちを指導して資料整理している。牧地区の人達の着物類をデータ化している。東郷氏たちが収集した当時、基本的なデータは作成していたが、分類整理ができていなかったものを再整理しているのである。

また、東郷氏が「80や90を超えた年齢のおばあちゃんに来てもらう。おばあちゃんが型紙をつくって着物を復元してくれると、助手の女の先生が勉強になる」と言うように、技術の伝承にも寄与しているようである。今後、報告書を作成して文化財の指定にもっていきたいと抱負を語る。

4. 田上郷土史料館の形成過程を検証する

ここまで述べてきたことを踏まえ、本稿の冒頭に示した留意点について考えてみよう。

まず、二人の若者は、なぜ資料を集め出したのだろうか。東郷氏によれば、初めは民具という認識はなかったという。村はずれの田んぼでモノを燃やしている場所に行ったら、いろいろなものが捨てられていた。「これはいったい何だろう」と疑問に思いながらも、「面白いものがあるで」といって、気になるものを持って帰り、境内に置いておいた。「お前はそんなモノを拾ってきてどうするんや」と古老からいわれた。若者にとっては何も知らないものであったが、古老は「こうして使うものだ」と教えてくれた。さらに、「こういうものだったらあそこの家にもある」と教えてくれたので、そこからも集めたという。つまり、未知のモノに対する好奇心が、彼らを突き動かして収集したことが分かる。

次に、民具の収集や史料館の設立や活動をめぐり、住民の連帯感や信頼関係が生まれるようになったとすれば、それはどうしてなのだろうか。民俗学者の宮本常一は、昭和56（1981）年に、東和町（現山口県周防大島町）郷土大学開校の挨拶の中で、連帯感と信頼感の意味について触れている。「民具を集めたり、民具の調査をしたりしていくうちに、これまでこの町で生きてきた人たちの生き方に共感を持つことができるようになります。その共感があるからお互いに生きてゆけるのです。そういう共感がより深まったものを我々は信頼感といいます」。連帯感とは、課題が生じたときに皆で話し合うことにより、自分

一人の問題ではなく全体がよくなるにはどうしたらよいかと思うようになった時に生じる。こうして連帯感や共感、信頼感のもてる社会をつくっていくためには、豊かな世界を築いていく上で一番の基礎になるものだとしながら、自分たちが願いをもち、その願望を実現させてゆこうとするものでなければならぬと指摘している⁽¹⁾。

東郷氏と田村氏の二人の若者が民具を集め出すと、地元の人々が協力してさらに多くの民具を集めることができた。最初は寺の太鼓楼という参拝者の休息所（当時使われなくなっていた）で保管していたが、自治会の理解と協力により、集会所であった施設を移設して史料館にした。住民たちは左官や大工仕事など、それぞれが有する技と経験を用いて移築したのである。そうした経過の中から史料館をめぐり、新たな信頼感が人びとに生まれたといえるだろう。

また、村人が使った民具をまとめて保管するためにどうしたらよいか、という課題に対して、自治会が旧集会所を史料館に転用することを決めたのも、宮本が云うところの連帯感の裏付けになるのだろう。先述したように東郷氏による「ゆい」を考える」（『郷声』第二号）という記事で示した、地域の人々との共同性、結の精神を再確認してほしいという願いは、そうした経験から自然に生じた思いであったのではないだろうか。

田村氏は残念ながら数年前に亡くなったが、東郷氏は史料館の活動によって知り得た昔の人達が経験した地域の生活文化を若年者に伝えている。また、地域の文化財を収録した『牧町の宝もの』という小冊子を発行し、地元はもとより県内外の人達に旧上田上村の生活文化を知ってもらい取り組みを続けている。

最後の留意点として取り上げた、史料館が目標に掲げている「郷土愛」とは、どのような意味合いで使用しているのかについて考えてみよう。東郷氏によれば自身が「郷土」や「郷土愛」という言葉を用いたのだという。郷土とは、上田上（旧八か村）のことをいう。「郷土愛」とは、「お爺さん、お婆さん達が苦勞して働いたおかげで、どこにも負けない教育をした。皆が協力して鉄筋校舎の小学校をつくった」という思いを込めたものであるという。教育に熱心な土地柄になったことは先人達の労苦のおかげだと、繰り返し語っていた。

先述したように、『郷声』（第一号）に書かれた同館の目的の「若者には郷土

愛を育む」ということは、「昔のお爺さん、お婆さんの労苦を忘れずに見習え」という意味であるという。同じく、「古人の労苦を偲び」という部分については、昔は水害により、田上の米作りに精を出して作った田んぼが荒廃すると、その後綿づくりをした。その後、開墾して田んぼに戻す。米づくり→綿づくり→米作り。どれだけ苦労したことか。農具一つをとってもその苦労を感じることができる、ということである。「米に水がいるのに水に苦労させられた」と古老からよく聞いたという。つまり、郷土愛とは、一概に郷土を懐かしむことや誇りをもたせることではなく、昔の人達が大変苦労したことに対する敬愛の気持ちを意味しているのである。

5. 柳田國男の郷土館観との整合性

「郷土」という概念は、もともとは19世紀のドイツにおけるプロイセン王国時代に生まれたハイマートクンデ (Heimat Kunde = 郷土科) を、明治政府が明治20年代にドイツの学制を導入した際に取り入れた概念だといわれる⁽²⁾。ハイマートクンデは、当初自然主義の影響を受けて、郷土を人間の基礎と見なし、歴史や自然面から位置づけを試みようとするものであったが、第一次大戦に敗北したドイツでは、民族意識を意図的に植え付け、祖国愛に発展させていった。日本でもその影響を受け、昭和初期において、国民の民族意識を高め、愛郷精神を育成するための郷土教育が顕著となった⁽³⁾。郷土博物館も、郷土を顕彰する偉人やそれにまつわる歴史や文化遺産などを中心に取り扱うようになり、愛郷心や愛国心を涵養させる国民教化の手段とする考え方が顕著になった。

民俗学者の柳田國男は、昭和初期の郷土館について苦言を呈している。柳田にとって、当時の郷土館は、柳田が目指すような郷土研究や郷土教育論を反映したものと言えるものではなかった。なぜならば、上流階級、顕彰者、囚人のように一部の人間の出来事を取り上げるだけで、一般人(百姓)の生活が不明であったからである。つまり、柳田の郷土研究は日本人一般の歴史を探求することを目的にしていた。政治や社会のアクシデントや、特定人物を取り上げて歴史を叙述しようとする歴史観とは異なるものであった。資料はただ並べているだけで相互の繋がりがなく、良い指導者もおらず、家庭(親子)の利用者も

いないということも問題であった。よって今後、郷土館を設計するための大事な留意点は、「村の人たちに教えたいことは何であるか」「村の人達の疑問—即ち公の疑問—は何であるのか」と、柳田は指摘した⁽⁴⁾。

それより15年ほど前、柳田は全国の府県や町村で行われている郷土誌の編纂に対して、「個々の郷土がいかにして今日あるのか。またいかなる拘束と進路とを持ちいかなる条件の上に存立しているのかを明らかにし、その志ある者をしてこの材料に基いて、どうすれば今後村が幸福に存続して行かれるかを覚らしむるように、便宜を与えてやらねばなりませぬ」という問題意識をもって取り組むように忠言している⁽⁵⁾（アンダーラインは筆者による）。柳田は当時、官吏として農業政策に携わっていたが、その後、職を辞して民俗学を形成することに生涯をかけた。「何故に農民は貧なりや」という疑問を根本的な問題とし、そのために「学問救世」となる民俗学を構築することにより、世の中を救うことを自らの使命としたのである⁽⁶⁾。

柳田による当時の郷土博物館や郷土誌編纂に関する指摘は、80年以上経った今日でも看過することができないのではないだろうか。現代の博物館でも、郷土の偉人を顕彰することや、通史展示やテーマ展示をするが、柳田が問いかけたような問題意識をもち、それらに対する答えを提示しているところはほとんど見当たらないからである。

ここで、改めて柳田の郷土館についての問題提起を整理すると次の通りとなる。なお、それぞれの括弧内には、筆者による補注を加えておく。

- ①今日の郷土は如何にしてあるのか（由来や歴史を明らかにする）
- ②人びとに伝えたいことは何か（目的は何か）
- ③人びとにとっての公の疑問とは何か（地域の課題は何か）

こうした柳田による設問を、筆者は東郷氏に問いかけてみることにした。すると、東郷氏は次のように答えてくれた。

①今日の郷土は如何にしてあるのか

昔からの水害の苦労を経て今日の生活がある。230年前に低い土地から現在の地に移住した。この土地は円徳山というが、字名は「恋ノ山」。お爺さん、お婆さんたちが水害の苦労から逃れたい、「恋しい山」という憧れの気持ちから「恋ノ山」という地名になったという。大津市上田上牧町字恋ノ山。町内は

全て東郷氏の寺の檀家であることから、寺と史料館とは密接な関係性をもっている。

「恋ノ山」という地名は一見、ロマンチックに感じるが、実は先人たちの苦勞があったことを住民たちに伝えている。

②人びとに伝えたいことは何か

昔の人達が経験したことを今の若い人たちに伝えたい。便利な世の中になってしまい、不便さを知らない。上田上小学校（児童100名ほど）は、地域と連携が良くとれている。1年～6年生が学年ごとに地域の人達から昔の生活を学ぶ。地域のお爺さん、お婆さんが関わる授業もある。6年生は和紙の里で紙漉きしたものを卒業賞状に使う。5年生は菜種づけをする。史料館では、母親たちも参加して昔ながらの餅焼きをする。

子どもたちに実体験させることにより、昔の暮らしぶりを伝えている。

③人びとにとっての疑問は何か、公の疑問とは

最近、高速道路が建設されることによりホテルの生息が脅かされる事態が生じている。そのため、皆で残すにはどうしたらよいかについて相談し、迷惑料として水路をつくることでホテルの生息が維持できるように市と交渉した。

開発行為によって生じる地域の課題について、住民が結束して解決策を行政に要請した。先述した宮本が指摘したように、地域に生じた課題を解決するために、住民達の連帯感が行動を起こさせたといえよう。

以上のことは、果たして柳田の設問の答えになっているのだろうか。筆者にとって印象的であったのは、東郷氏が即座に答えてくれたことである。しかも、とても簡潔な内容であった。今日の上田上の人びとの生活は、水害の歴史の上に成り立っていることや、昔の上田上の人達の生活ぶりを今の若年者に伝えたい、そして開発行為によって自然が脅かされている地域の課題を解決するために大津市に掛け合っている。

柳田が郷土博物館に求めたものについては、時代や社会状況が当時と異なるので一概にはいえないだろうが、田上郷土史料館の使命と照らし合わせてみると、柳田の設問に対する答えと重なるように思われる。田上郷土史料館は、「歴史を知り古人の労苦を偲び郷土愛を育み郷土文化の向上の一助となること」

を使命としている。この土地は水害の歴史があったが、先人達が苦勞して働いたおかげで今日の生活があることを住民たちに伝えている、また文化財保護や普及活動を通じて、地域の課題を解決することに取り組んでいるからである。

おわりに

本稿は、田上郷土史料館の設立と、その後の活動から、史料館をめぐる住民の連帯感や信頼関係の形成過程を検証することを目的にした。その結果、判明したことは次の通りである。

田上郷土史料館の設立と、その後の活動のプロセスは、住民たちによる手作りの文化運動であったといえる。戦後の経済成長が農村に押し寄せる時代変化のなかで、人びとが新たな目標に向かって協力、共同した姿をみることができる。

昭和30年代から40年代、旧上田上村の周辺地は、次第に工業地域に変貌していったが、まだ農業を生業とする生活文化が残されていた。農業を営んでいる人達の中には、都市部に働きに出るようになった人達が現れるようになり、かつての村落共同体の気風や生活習慣が次第に失われるようになっていた。「消費が美德」といわれる大量生産大量消費の社会風潮がこの地にも及ぶようになり、人びとの意識も少しずつ変わり始めていた。その頃、二人の若者が中心となり、住民たちの協力や支援を得ながら、民具収集、史料館設立、地域文化の再評価や文化財の保護活動が住民主体によって行われた。農村社会の社会的な信頼関係に変化が生じ始めた時代に、史料館の設立や活動を巡る、新たな住民意識や地域社会の関係性が生まれたのである。

また、郷土博物館などでしばしば使われる「郷土愛」という言葉の意味には、実はいくつかの使い方があったということが分かった。戦前期は、政府による国民教化策により郷土博物館も郷土愛を涵養することが目的とされたが、その郷土愛とは愛国心を養成する延長線上に位置付けられたものであった。これに比べて、田上郷土史料館の使命に掲げられた「郷土愛」とは、先人の苦勞に敬愛と感謝の気持ちを表した言葉であった。昔から地元で生活する人たちが、その土地の歴史や文化を調査することや、過去の遺産を保護すること、先人の苦勞に感謝する気持ちを郷土愛と表現している。これは東郷氏に対する聞き取

り調査によって判明したことであるが、もし文面だけで判断していたら、田上郷土史料館に対する評価は異なるものになったかもしれない。聞き取りをすることができたおかげで、その真意を知ることができた。

郷土愛とは本来、その土地に生まれ育った者が、自然や生活、文化などの環境の中で自然に抱く感情であろう。外からの移住者にとっては、その土地の人との交流を通じて、その土地に愛着をもつことはあるだろうが、それは郷土愛というよりも、愛着心のようなものかもしれない。いずれにしても郷土や土地を思う気持ちは個人が自然に抱く感情であり、政府をはじめ学校や博物館などのような公共機関が唱導するものではないということを確認しておきたい。

[註]

- (1) 佐野眞一 2003『宮本常一のまなざし』みずのわ出版
- (2) 後藤和民 1979「郷土博物館」『博物館学講座』4、雄山閣
- (3) 加藤有次 2011「郷土学」『博物館学事典』全日本博物館学会編
- (4) 柳田國男 1929「郷土館と農民生活の諸問題」『農村教育研究』第二巻第一號
- (5) 柳田國男 1914「郷土誌論」『柳田國男全集27』所収（ちくま文庫版）
- (6) 福田アジオ 2017『柳田国男入門』伊那民研叢書2、柳田國男記念伊那民俗学研究所

謝辞

本稿の執筆にあたり、田上郷土史料館館長の東郷正文氏には、快く調査に応じてくださり、また草稿も確認していただいたことに感謝申し上げます。また、大津市歴史博物館の学芸員の木津勝氏からは田上郷土史料館についての情報をご教示いただいたことにお礼申し上げます。

本研究はJSPS科研費 JP17K01212の助成を受けたものです。

ABSTRACT

The establishment and the development of the museum by inhabitants

An example of the Tagami local museum, Shiga prefecture

Yoshiaki KANAYAMA

This article examines the process that how the museum established by inhabitants becomes the core of local cultural activities, taking the Tagami Local Museum, Shiga prefecture as an example. The basic data of this report depends on a hearing survey by Mr.Masafumi Togo.

There are three points to achieve a purpose of this report.

The first point is the reason the inhabitants collected daily used articles. According to Mr.Togo, formerly the inhabitants did not know how to use them or even did not recognize them as daily used articles. However, they gained interest because aged people taught them how to use the articles, and finally they built a huge collection.

The next point is the change inside the inhabitants mind; by collecting and researching the articles, establishing a museum, and get going. The inhabitants formed trust and cooperative relationship with others, in the process of the museum establishment.

The third point is the meaning of the word “regionalism”. Regionalism does not simply mean the nostalgic feelings, or to be proud of the certain district; but also the feeling of thankfulness for the aged people who experienced the hard times.